島尾敏雄作品集

1

晶文社

島尾敏雄作品集　第1巻

昭和三十六年七月二十日初版
昭和五十一年十月三十日十五刷

著者　島尾敏雄
発行者　中村勝哉

発行所　株式会社　晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
振替口座東京六―六二七九九番
電話東京(二五五)四五〇一

印刷　株式会社堀内印刷
製本　有限会社美行製本

© 1961 <検印廃止>　落丁乱丁本はお取替えいたします

島尾敏雄作品集 1

目次

島の果て　一
孤島夢　二〇
摩天楼　二六
石像歩き出す　三三
蜘蛛の行　三八
単独旅行者　四四
夢の中での日常　六八
徳之島航海記　一〇三
月下の渦潮　一三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

挿話　一五七
薬　一七四
勾配のあるラビリンス　一八五
格子の眼　一九八
唐草　二一六
アスファルトと蜘蛛の子ら　二三六
砂嘴の丘にて　二四九
鎮魂記　二六六
ロング・ロング・アゴウ　二八二
奥野健男・解説

島の果て

むかし、世界中が戦争をしていた頃のお話なのですが——

トエは薔薇の中に住んでいたと言つてもよかつたのです。と言うのは薔薇垣の葉だらけの、朽葉しきつめたお庭の中に、母屋と離れてぽつんとトエの部屋がありました。ここカゲロウ島では薔薇の花が年がら年中咲きました。その部屋の廻りは木の廊下がめぐつていて、ひとところだけが母屋に通ずる取りはずしのできる橋廊下になつていました。夜になると三方に紙の障子をたてめぐらして蠟燭をともしました。そして木の戸をひきしめて戸締りを厳重にすることもなくてすんでいたのでした。

トエの一日の仕事というのは部落の子供達と遊ぶことでした。部落の子供という子供がみんなはだしでトエの庭に集つてくるのです。トエは子供達に歌を教えました。

浜千鳥、千鳥よ
何故お前は泣きますか——

トエがいくつになるのか誰も知らなかつたのです。たいへん若く見えました。小鳥のように円い頭をしてほかの娘たちよりいくらか大きなからだつきをしていました。娘らしく太つていました。それでも体重はむやみに軽かつたのです。顔だちはと言えば、ほかの島娘たちとそう違つているようにも思われなかつたのですが、ただ口もとに特徴がありました。ほほえむと、口もとは横に細長くきりりとしまりました。部落の人たちは大人でも子供でもトエは自分たちと人間が違うのだと考えている人が多かつたのです。それは昔からトエの家の人たちはそういうふうに、思われてきたので、ほかには別に理由はなかつたのですが、不思議なこととも思われずに

トエは部落全体のおかげで毎日遊んでいてくらして行くことができましたが、二、三の年寄たちは、トエがこの部落の生れの者でないことを知つて居りました。

その頃、隣り部落のショハーテに軍隊が駐屯してきました。そのためにトエのいる部落にも何となくあわただしい空気が流れ、世界の戦争がこのカゲロウ島近くまで覆いかぶさつてくる不吉な予感に人々はおびえました。一体何人ぐらいの軍人がやつてきてどんなことをするのだろう。部落にとつてめいわくなことが起りはしないだろうか。頭目という人はどんなひとだろう。あれこれと部落びとは心配をしました。

だが、やがていろいろなことが分りました。ショハーテの軍人は百八十一人で、その頭目の若い中尉は、まるでひるあんどんみたいな人であること。むしろ副頭目の隼人という少尉さんの方が、男ざかりではあるし経験もつみ万事てきぱきとして人との応待も威厳があつて軍人らしい。百八十人の部下は——いや、隼人少尉を除いて百七十九人の部下は、若い頭目に同情はしているけれども、副頭目のきびきびした命令にすつかり服従しているらしい、などということどもでありました。だから頭目の一日の仕事というのは、自分の領分内の、チタン、サガシバマ、タガンマ、スンギバラ、それから対岸のウジレハマなどを廻り歩いて十二の洞窟と八つの合掌造りの兵舎の様子を見てさえいればそれでこと足りるのさ、という評判でありました。

朔中尉——と、そう頭目は呼ばれていたのですが、背は高いがやせていると部落では噂をされました。それに引きかえ隼人少尉はずんぐりしていて真赤な丈夫そうな顔付をしていると言われました。

副頭目は心の中で朔中尉をそんなに好きではなかつたのですが、表向き二人は仲良くやつているように見えました。で、お酒を飲んだりしたときは、袋の中の錐のように隼人少尉の言葉はちくりちくりと朔中尉をつつきました。時とするとぐでんぐでんに酔つぱらつたふりをして朔中尉にあてつけの、乱暴をすることもありましたが、朔中尉は何も言おうとしませんでした。だから隼人少尉は頭目は何を考えているのだろうと思いました。実際の所、朔中尉が何を考えているのかちよつと誰にも分らなかつたのです。

戦雲は拡がつてきました。敵の飛行機がカゲロウ島の上空にもぽつぽつ現われるようになりました。

或る日非常に悪い情報がはいりました。——カゲロウ島に大空襲がある。戦局は急転直下の変貌を示した。敵は新しい作戦を計画したようだ。大空襲のあとに、敵は島に上つてくるだろう——

この情報は朔中尉の軍隊にもてき面にひびいてきました。空襲にそなえて洞窟の前に爆弾の被害をさける柵を構築せよという命令がきたのです。

その命令を朔中尉が受取つたのは夕方の食事もすんで、たそがれ行くはまべには、もう寝るばかりの一日の中で一番長くてのんびりした休憩の、時の移り行くのを惜しむ姿がちらほらしていた時でした。ハモニカを吹いている若者もいました。どうして情報の急変などということが考えられましょう。

だが、小高い本部の木小屋でそのような夕ぐれに身をまかせていた頭目は隼人少尉を呼んでこう言いました。

「隼人少尉、この作業は徹夜をすることになつても止むを得ん。今からかかりましよう」

それをきいて隼人少尉はぼつぼつと闘志のみなぎり来るのを感じました。やがて隼人少尉のきびきびした作業の区処により十二の洞窟の前にはランタンのゆらめくあかりが見え、丸太のぶつかり合う威勢のよいひびきがきかれました。この洞窟の中には実はたいへんなものがかくされてありました。それはいよいよ敵がカゲロウ島に上つてくるときにだけ使われるもので、その色々のことについては頭目と百七十九人の中から選ばれた五十一人の者だけしか知らないことでした。

朔中尉は胸さわぎがしました。運命の日があまりにあつけなく眼の前にやつてきたことに甚だ不満のようでありました。しかし、一方これから起るかもしれない未知の冒険にふるい立つ心も湧いてきました。ただどうしても心にかかることが一つだけあつたのです。それはその日がすつかり暮れてしまつたら、シヨハーテの部落の督督基（トクトクキ）さんの家を訪ねる約束をしていたことでした。それは——

督基さんのところのヨチという女の子に、若い頭目は心ひかれたのでした。というのは、中尉さんがヨチを背負つてやつたときに、やわらかい二本の足と中尉さんの肩をそつと摑んでいるヨチの可愛い掌と、そしてそつと中尉の頬をくすぐつたヨチの息遣いが忘れられなかつたのです。ヨチは中尉さんの胸までも背丈はありませんでした。前の日中尉さんがシヨハーテの部落うちを通つたときに、赤ん坊の督四（トクヨン）をねんねこで負ぶつてふくらんだヨチがいきをはずませて、

「中尉さん中尉さんシヨハーテの中尉さん」と呼びました。

中尉は立止つて督ヨチの赤いくちもとをじつと見ました。まつげが頬にかげを作る位長いのです。おむすびのように大きな黒い頭のヨチが思いきつて言いました。背中の督四をあやすので始終からだをゆすりながら。

「ガジマルの木の下にケンムンが出てこわいのです」

ねんねこが短く二本の細いすねと素足のくるぶしがいたいた

しく見えました。
「こわいから遊びにいらつしやいね、ね」
「あした又」
朔中尉はぽつんと歩きながら島ことばで答えて、しばらく行きすぎてからふり向いてつけ足しました。
「すつかり夜になつてから」（それまでにヨチのために棒飴をつくらせて——）
——その約束を思い出したのです。ひよつとしたら予感にたがわず明日あたりからカゲロウ島は激烈な戦闘の様相を帯びてくるかも知れない。カゲロウ島そのものがこの地球の上から無くなつてしまうようなそんなことはおそらくないだろうし、又此処の島びとたちはいのちのふかしぎから島の草木と共に生きのびるかもしれない。ああ、島に駐屯している軍人たちでさえもその幾人かは颱風一過のあとでこおろぎの音色に泣くものもあるだろう。しかし朔中尉と五十一人にはそのことは或る命令のために考えてみることさえせつない、望まれないことでした。
中尉さんは心の中で泣きました。ヨチとの約束を守らなければいけない。一途にそう思つたのです。
隼人少尉と百七十九人はそれぞれの仕事をして居りました。いつのまにか夜空が険悪になつて雲の流れる気配が地上にまで伝わりました。風さえ出てきたようです。
中尉さんは木小屋の本部の頭目の部屋にはいると従卒を呼びました。
「小城よ棒飴を持つて俺に続いてきておくれ」
小城は急いで棒飴を風呂敷に包むと、はまべに下りて行つて小舟を用意しました。中尉は黙つて黒々と小舟に乗り移ると、小城は櫂で急がしく漕ぎはじめました。櫂の音は仕事を監督していた隼人少尉の耳にはいりました。少尉は闇をすかして入江の中を見ると、ショハーテ部落の方にへさきを向けた小舟に頭目らしい人影と従卒のそれを見たのでした。風が出てへさきはぐるぐる廻りました。でもほどなく小舟が目的の岸につくと中尉さんは岩の上にとび上り、小城従卒から棒飴の包みを受取ると闇の中に部落の方へと消え去りました。小城は杙に小舟をつなぎ腰をおろし頬杖をついて自分の仲間が仕事をしている対岸の方をぼんやり眺めました。ランタンの灯がみぎわで伸びたり縮んだりしているのを見ていると、子供のとき泣き笑いしてみた街の灯が十字架のように伸び縮みしたこととごつちやになつていました。黒い雲が一ぱい出て来たようでありました。
中尉さんのおとのうた家は、居間と台所の二間しかない極く貧しい掘建小屋のような家でした。それなのに家の中には沢山の子供が居りました。あるじの督基さんはここ一箇月ば

かり前にウ島のクニャに行つて未だ帰つてこないということでした。おかみさんのウイノさんはこんなことを言いました。

「中尉さんこんなに沢山の子供をちよつと見て下さい。むかしちいさこべのすがるはきつとこんなふうでしたでしようね」

中尉さんは笑いました。ほんとに、督熊、ヨチ、督二郎、リエ、督三それにややこの督四、こんなに沢山いる——小さなヨチはその中でお姉さんのように振舞つていました。もう寝ていた弟の督二郎や督三も妹リエもにこにこ笑いながら起きてきました。ヨチはお姉さん顔をしてお行儀をたしなめたりしました。牛乳のような匂いにみちてこんなに沢山の子供がいるのに朔中尉には何故かとても寂しく感じられてなりませんでした。それは胸がしめつけられるような寂しさでありました。もし、その日が来たときにはこのやわらかな子供たちはどんなことになつてしまうのだろう。この考えは居ても立つてもいられないものでした。

「この島に敵が上つてきたらこの子供たちをどうしましよう。中尉さん敵は上つてくるのですか」

ウイノさんはこうききました。

「こんな小さな島に来るものですか」

中尉さんはごまかしました。そしてそんなふうにしらばくれていることにがまんができなくなりおいとま乞いをしました。敵が上陸して来そうだからこそお別れにきたのではありませんか。子供たちはおみやげの棒飴をおいしそうに食べながら膝小僧をそろえてあがり口に並びました。

「中尉さん、さようなら、ショハーテの中尉さん」

中尉さんは子供たちの手をにぎりました。おお、やわらかな手、世の中にこんなにやわらかいものがあつたのだろうか。ヨチはおませな口調で、

「ね、中尉さん。トエが、トエがお魚をたくさんたくさん買いましたから、ショハーテの中尉さんに、いつしよに食べにおいでつて」いきをはずませて言いました。

朔中尉の前にもうこの世のことは何もありませんでした。追つつけ命令が下り、あの洞窟の中のものを海に浮べて打乗り、敵の船に体当りにぶつかつて行くこの世とも思われぬ非情な自分と五十一人それぞれのふう変りな運命の姿ばかりが先立つのです。小舟のある所まで行くのに足がふるえました。がつくりと小舟に乗ると、小城は岸からこぎ放しました。折しもせききれなかつたもののようにさあーつと水の面をたたくものがありました。それはあたりがしぐれてきたのでした。水面にはぽつぽつぽつぽつ一ぱいあばたができました。黙つて二人とも濡れました。ウイノさんがくれたビーナッを小城のポケットにいれてやると小城は黙つて頭を下げました。仕事はもう終つてしまつたらしく、チタン、サガシバ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マ、タガンマ、スンギバラ、ウジレハマはみんな物音もなく雨足のみ蚕しぐれのようにふりそそいでいました。

次の日は、一日中雨でした。

そしてこの島への危険は通りすぎたようでありました。敵はずつと東の方の小島に新しい作戦をはじめ出しました。

雨勢はだんだんつのつてきて、車軸を流すようになつたので、午後はみんな休みました。中尉さんはつかれたので自分の部屋で寝ました。板敷の床下でヒメアマガエルのなくのをきいているうちにすつかり眠つてしまいました。

……夢の中で隣の部屋の人声がやかましくて仕方がない。そんな傍若無人な奴はとても許して置けないと自分でひどくいらいらしてるなと思つていると眼が覚めました。部屋はまつくらでした。またいつのまにか夜のとばりに覆われて、雨は相変らず降つていました。そして隣室では実際に人声がしていたのです。きくともなくきいていると次のような言葉が耳にはいりました。

いつどんな命令が来るかも分らないのに……それにみんなが大切な仕事……そんなふうだから……四号の洞窟……眠つてはいられない……

朔中尉にはその意味がすぐぴんと来たのです。隼人少尉の蛇のように冷く沈んだ眼の色を思い出してびくりととび起きたのです。

中尉はわざと足音高く隣の部屋にはいつて行きました。隣の部屋ではランプを三つもともして隼人少尉が部下の主だつた者の二三人をあつめてお酒を飲んでいました。まつ赤な顔をランプの灯にてかてかと光らせて、

「これはこれは朔中尉どの」

酔つた調子で、でもいくらかてれくさそうにこう言いました。

「おやかましくて、おやすみになつてはいられますまい」

二三人の主だつた部下は一寸困つて酔がさめたような様子をしましたが、朔中尉は立つたままにこりともしないで言いました。

「隼人少尉、洞窟四号の話は本当なの？」

「さあ、本当にもなにも、御覧になれば分ることでさあ……なあ伊集院（イジュイン）」

と一人の部下の方に赤い顔を持つて行つたのです。

「そう」

中尉さんはそう言うと静かにその部屋を出て、自分の部屋に戻り、紺のレインコートを釘からはずし、それを着ながら雨の中に出て行きました。

しばらくして、雨の中を当番が、洞窟四号の作業受持の者

集合の命令を伝えて歩きました。それをきいた隼人少尉はふと、どきりとした顔付をしましたが、にが笑いをしながら右の手でぶるんと顔をなでると、
「やれ乃公はおやすみ遊ばすか。伊集院お前たちも寝たらどうだ。それとも洞窟四号の受持かな」
というと、もう寝台の上にからだを横たえていました。
洞窟四号の前には十五人ばかりがしぶしぶ集つて来ました。折角積みあげた土嚢は無残にも崩れてしまつていました。そこは地面がやわらかなのと山の地下水の道筋になつていたらしく小さな川のように水が湧き流れ出て、すつかり土を洗い流してしまつているのでした。崩れた土嚢を見ると中尉はそれが醜い自分の姿のように思えました。集つた者は口の中でぶつぶつ言うことをやめませんでした。雨水は襟といわず袖といわず、ひやひや気持悪く肌の中に流れこんできました。
「先任の者は集つた者の数をあたれ」
そう中尉が言うと、誰かが小きな声で、ちえつ仕事にならねえと言いました。中尉はそれをきくとぐつと胸につかえました。突然に何とも知れぬ大きな悲しみの底につき落されました。やがてそれはからだじゆう真赤になるような恥ずかしさに変りました。と勃然と憤怒が湧き上つてきました。
「待てつ！」
自分でもびつくりする程すき透つた大きな声が出ました。
「お前たちは……お前たちは只今即刻兵舎に帰つてやすんでよろしい。ぬくぬくとやすんでいてよろしい」
部落の方にまできこえるように大きな声でした。とつさのことに十五名ばかりの者はそこを動きませんでした。じつとして動かずに雨に打たれて中尉さんの次の言葉を待ちました。すると、中尉さんの顔にはさつと殺気が走つたようでありました。が次の瞬間にはそれはくしやくしやに崩れて泣顔になり持つていた竹鞭を振り上げて叫びました。
「わかつたらやすんでよろしい。よろしいと言つたらよろしいのだ」
いつにない頭目の剣幕に十五人ばかりの者は白けきつた気持で各々の兵舎に帰つて行きました。そのあとに残つた中尉さんはたつたひとりでその仕事をやり始めたのです。始めに水の流れる一帯を掘り起しました。それはぐんぐん破壊して行く仕事でした。そのみぞにはバラスをつめました。そうして一人で持てばたいへん重い土嚢を一つずつ積んで行きました。その仕事がすつかり終る頃には、夜は深更に及びいつか雨はやんで居りました。雲の割れ目から月が出て居りました。その夜は十六夜の月でありました。この哀れな中尉さんの頭は熱病のような交響楽で一ぱいでありました。腰をさすつて見上げた雲の中のお月様はとても険し気でありました。

彼は自分の運命のようなものを感じないわけにはいかなかつたのです。その夜も生きていたのでした。そうして敵がいよいよウ島やカゲロウ島めがけてやつて来るのはきつとお月夜の晩にちがいない、と彼は突然の啓示のようなものに打たれました。彼は寝ようと思い、本部の木小屋の方にやつて来る途中で峠へのぼる道の分れている所に出ました。（トエが、お魚沢山沢山買いましたから……）その峠は小さな峠でそれを越すとトエの部落は眼の下に見えるはずでした。つと誘われるように中尉さんは峠への道を選んでおりました。彼がシヨハーテに駐屯するようになるや否や誰からともなく隣部落のトエのことは耳にはいつてきて、その部落にトエが居るということは既にさだめごとのような気持になつていたのでした。しかし中尉さんは未だ一ぺんもトエを見たことはなかつたのです。峠に出る途中には人間のような声で鳴く蛙が一匹居りました。

峠には小さな箱小屋が立つていて中尉さんの部下が寝ずの番をして居りました。

「頭目、峠の上もまたここから見渡すことのできる眼路のかぎりあやしげなるもの無し、又けたいな物音もきこえぬようであります。雨は〇〇三〇（まるまるさんまる）に停止しました」

自分の頭目の姿を認めた寝ずの番はこう言いました。中尉さんは黙つて頷きました。眼の下には海の色が月光で青冷めて輝いていました。部落はもう少し山の鼻を廻らないと見えないのです。中尉さんが峠の向う側に降りて行く様子を察すると寝ずの番は尋ねました。

「頭目どちらに」

「山の端の向うの青白い月夜の部落には真珠を飲んだつめたい魚がまな板の上に死んだふりをして横たわつているのだ。私は是非ともその様子を見届けて来なければならない」

頭目は気どつてこんなふうな答を与えました。

山の端を廻つた所には、大きなガジマルの樹が不気味な沢山の手をひろげて道に覆いかぶさつて居りました。この樹は悪魔の樹なのです。ヨチのおそろしがつた細いしつこい声がきこえるような気がしました。その下を走るように通り過ぎると、トエの部落が摺鉢の底のように肩をよせ合つて寝ていたのです。その部落のたたずまいは朔中尉の心を深くとらえました。朔中尉は生れて二十八年の間にこんな印象深い夜の部落を見たことはないような気になりました。そしてこの後とてもこの部落の真昼の有様を知ることはなかつたのでしたが——まるですつかり夜の部落でありました。人家はかなり沢山あるのに、部落の道を通う人影はひとつもありませんでした。人家の中でひとの気配がしているにもかかわらず、あかりは少しももれてきませんでした。部落の中はすべて、朔中尉のひとり歩きのためにつくられているようでありまし

た。月かげで、ものなべては青白く、もののかたちは黒々と区切りがついていました。それに中尉さんが部落の路地にふみこむと何とも言いようのない芳香に包まれてしまいました。たとえてみるなら、全体の調子は甘いのですが、それは橘の実のすつぱさで程よくぼかされていました。さき程の雨で部落はすつかりしめりわたりその匂いはむせるようでありました。部落うちには到る処古びた大木があつて、ひげのように、長い沢山の根や茎を垂らしているのでした。この大木たちはお互いに肩を奇妙なふうに組み合わせて部落を包みこんでいました。名知れぬ花が夜だけそつとその蕾を開くとさえ言われていました。

中尉さんは何故かこつそり足音をしのばせて、ひとひとり居ない月夜の部落を歩いているのでした。そして自分の足音をきくことに心ときめかせて、とある中庭にまぎれこんだのです。中尉さんを導いたのは障子越しにゆらゆらゆらめいている蠟燭のあかりでありました。あそこだけにどうしてあかりがついているのだろう。こんな夜更けに——そう思いながら中尉さんは薔薇垣をぐるりと廻つて庭の奥に足をふみ入れると、庭一ぱいの腐つた朽葉が雨水にしめつて眼のように光つていました。朽葉の眼は幾枚も重つていて中尉さんが歩くとしめつぽい音をたてました。三方に紙の障子をたてめぐらしたその部屋をすきまから覗いてみたら、豪華な机の上に魚の御馳走が一皿だけのつかつていて、銀製の燭台の蠟燭が大きくゆらめいているのが見えるばかり、人かげはありませんでした。もつとよく見るために廊下に手をつこうとしてびつくりしました。そこに何か寝そべつています。そして百合の蕋の匂いがしたような気がしました。ワンピースの簡単衣を着た娘がひとり宿無し犬ころのように寝ていたのでした。中尉さんは、そうだトエだと思いました。中尉さんは手のひらの中にはいつてしまうような小さな懐中電灯を出してトエの顔を照らしました。大きな丸い顔にびつくりしました。頬の辺にうつすらと雀斑のあるのがはつきり写し出されました。トエはまぶしそうに眼をぱちぱちさせると右手で中尉さんをぶつようなしぐさをしてにつこり笑いました。それは口もとが横に細長くきりりとしまる特徴のある微笑でした。そして上半身を起し裾のあたりをおさえて、

「お月様かと思つたの」

と言いました。

「ごめんなさい。でも眠つていたのではありませんわ」

そうして、つと立ち上るとばねのような歩き方をして障子を開け放ち、中尉さんを招じ入れました。蠟燭がトエの姿の向うになるとトエのからだが衣通つて見えました。燃え尽きようとする蠟燭を新しいそれに替えるために、美濃紙で囲つた銀の燭台を一寸覗いたときにトエの顔は紅色のネガになつ

て輝きました。燭台をまんなかにして中尉さんとトエは少しななめになつて坐り、冷くなつたお魚の御馳走を黙つて眺めていました。中尉さんはお魚はあんまり好きではありませんでした。

「トエ」

ぽつんと中尉さんが呼びますと、

「え」

それまで眼を落していたトエは中尉さんの眼を見ました。そして彼女の運命をよみとつたのです。

「私は誰ですか」

「ショハーテの中尉さんです」

「あなたは誰なの」

「トエなのです」

「お魚はトエが食べてしまいなさい」

トエは笑いました。トエは娘らしく太つていました。いたずら盛りの小娘のように頑丈そうでした。ただ瞳がいくらかななめを見ていてたよりな気でありました。その瞳を見たときに中尉さんは自分が囚われの身になつてしまつたことを知りました。

やがて、にぎやかな羽子板星が東の空に見え初めると、あけがたの金星が対岸ウ島のキャンマ山の頂に輝き出すのに間もないことが分るのでした。

副頭目の隼人少尉をはじめ部下が寝静まつた頃おいになると朔中尉は峠への道を歩いていました。そしてその途中では必ずあの人間のような声を出す一匹の蛙におびやかされました。峠に立つた寝ずの番の前を通るときはたいへんつらい思いをしました。だがウ島のキャンマ山に金星が輝き出す頃には頭目の部屋は中尉さんの気配で満たされました。しかし、ひるあんどんの頭目・中尉さんの深夜の行動は寝ずの当番たちの口から隊全体に広がつてしまいました。

敵の東の小島での作戦は終りに近付きました。カゲロウ島では夜中にも敵の飛行機がとんでくるようになりました。

或る晩、中尉さんはすが目のトエを見ていました。トエはうたいました。飛行機からあかりが見えないように廊下には木の戸をしめ燭台にはトエの着物をかぶせてくらくしました。

遊ぶ夜のあささよ
宵ち思めば夜中
鶏歌とち思めば、よ
既夜ぬ明ける

トエがうたつていると、にぶいけつたいな音が耳にまつわりついてきました。それは南の方から、はじめはきこえるかきこえぬか分らぬ位の音がだんだんカゲロウ島の方に近付い

てくるのです。
トエはうたをやめると中尉さんにしつかりつかまりました。
「敵が来る」
そう言つてふるえました。
「トエ、何がこわいものか」
中尉さんは笑つてみせてもトエはふるえていました。
「敵、敵が来る、みんな知つてる」
そして中尉さんの顔を穴のあくほど見つめて言いました。
「行つちやいや。みんな知つてる。洞窟の中に何がはいつているか知つているの。こわい。トエこわい。五十一人のことも知つている。トエこわい。行つちやいやなの」

中尉さんがトエをなだめての帰り道、峠の例のガジマルの樹の下に来るときまつて峠の下の部落からあやしい音色が耳にまつわりついてきて歩みをさまたげるのです。そしてこんな気持に誘いこんでしまうのです。それは——部落全体が青い沼の底に沈んで、部落の人びとの悲しみが凝り固まり呪いの叫びを挙げているのです。やがて嬲々とした一人の狂女の声音になつて沼の底からメタンガスのようにぶつぶつふき出し、峠を越えて部落をのがれ行く青年をとらえて放さないのです。その歌声は長く長く緒をひいて今までのどんな音楽にもきいたことのないようなメロディなのでありました。中尉さんは両手の指で固く耳にふたをして急ぎますが、その音色をきかないわけには行かなかつたのです。それはトエがはだしのまま浜辺にとび出してきて歌つているのにちがいないのです。加那やもう見えらぬ……と。
隼人少尉も眼がくぼんできはじめました。隼人少尉は夜もおちおち眠れなくなりました。頭目が本当に頭目の部屋で寝ているかどうかが気がかりなのでした。頭目の部屋でことと音がする度に隣の部屋では隼人少尉の眼が異様に光つていたのでした。

しかし、やがてそんな心配はいらなくなりました。戦争の情況は全く行き着く所に来てしまつたのです。
頭目は昼も夜も、隊の外には一歩も出なくなりました。運命の日のそのときのために、頭目の朔中尉は部屋にこもりました。そして五十一人をひとところに集めては、最期のときのことについてこまかい打ち合わせをしました。
それは此の間のように骰子の出た目ではなかつたのです。日にちの問題でした。
昼間は敵の飛行機があぶなくて仕事などすることはとてもできなくなりました。それで、昼は洞窟の中に寝ていて、夜になると起き出してきては仕事をしました。しかしそれとて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com